

やまと 民俗への招待

鹿谷 熟

秋になると家の庭先などに、花弁が藤色の一重で、花の芯が黄色い素朴で上品な花を見かける。葉や茎は野性的で、すぐほどのなる。シオンだ。

笠置にほど近い奈良市狭川のある家で、庭先に咲いていたこの花の名前を尋ねたことがある。婦人はヒガンバナだと教えてくれた。彼岸の頃に咲くからだ。ではいま彼岸花と呼ぶ曼珠沙華は、と聞くと、キツネノカミンリとか、テクサリバナ(手腐り花)だという。

奈良市西九条ではマツリバナと呼んでいる。倭文神社の秋祭りで、蛇形のお供え物があるので

「蛇祭り」とも呼ばれるが、併せて粘土で作った小さな高壇に盆・花・飯・汁(茄子)を盛りつけた「花御供」も作られ、花にはシオンを用いる。

五條市東阿田では、この花をヨナベバナと呼んでいた。秋、この花が咲く頃になると、ヨナベ(夜業)が始まるのだという。暑さ厳しい時には昼寝をして、涼しく夜長の季節を迎えると、夜業仕事の開始を告げる花だった。この秋、天理市内でもヒガ



人家の近くに見られるシオン=筆者提供

幸せを運ぶシオン

平安時代末期の『今昔物語集』巻二に、兄弟二人が、萱草と紫苑を植えた話がある。父を亡くした兄弟が、長く嘆き悲しんで墓参りを欠かさなかつたが、そのうちに兄は萱草を墓の傍らに植えて、父親の墓に参らなくなつた。弟の方は、紫苑を植えて、いつまでも父を忘れまいとした。すると墓を守る鬼が弟を哀れみ、日々起きることを夢で先に教え、身の上のさまざまな善惡を知ることができるようになつたという。「されば、嬉しいことあらむ人は紫苑を植ゑて常に見るべし、憂へあらむ人は萱草を植ゑて常に見るべし」とこの物語は終わっている。

紫苑という植物は、平安時代末にはすでに、幸せを持続させると思われていた。

夜なべを推奨する花、季節の移り変わりを告げる花として、人々は長くこの花を近くで見続けてきた。人家近くに今もよく見られるのは、幸せを長続きさせる花という古くからの伝承が、意識されないまま今も心に潜んでいるからかもしれない。